ACTIVE 35 L I

●発 行●

2括・在宅介護支援センター

社会福祉法人福島県社会福祉協議会 地域包括・在宅介護支援センター協議会 企画広報委員会

〒960-8141 福島県福島市渡利字七社宮 111 TEL: 024 (523) 0102

E-mail: shisetsu@fukushimakenshakyo.or.jp

Vol. 7

2019年3月15日発刊

健康長寿いきいき県民 フェスティバル

を描いて与真に撮ってみませんか?

チェキで撮った"写真プレゼント"



現任者研修グループワーク

いただきました。



健康長寿いきいき県民フェスティバル



初任者研修の様子

会では、東北福祉大学准教授の工藤健一本協議会で今年度実施した現任者研修ンターの役割が期待されています。地域包括支援センターや在宅介護支援セ地域住民や各関係機関・団体とともに、分らしい人生を送ることができるよう、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で自システム」の取り組みが進められており、

各地域において「地域包括ケア

地域包括・在宅介護支援センターに期待 きいき県民フェスティバル」では、 学ぶことができました。 各センターの現状と取組課題を共有し される機能を果たすためには」として、 クでは、「地域包括ケアシステムにおける について講義をいただき、グループワー 待される機能と職員に求められる役割. る地域包括・在宅介護支援センターに期 先生から「地域包括ケアシステムにおけ 会では、東北福祉大学准教授の工藤健 コーナーを設置し、 ながら私たち地域包括・在宅介護支援セ ノターの活動について理解していただく また、福島県が主催する「健康長寿い 多くの皆様に御来場

皆様の事業展開の参考になれば幸いです。いたしますので、是非ご覧いただき、今後一今号では、各支部の取組状況をご紹介



地 部

『地域住民と支えあいの

二本松市岩代地域包括支援センター

管理者 工藤 知美

約6, 地区で、 7%。山々に囲まれた自然豊かな ちが担当している岩代地区は人口 現在6ヶ所となっています。私た に取り組んでいます。 地域包括支援センターが委託され、 識が豊富で地域での活動に積極的 |本松市では平成29年4月より 800人。高齢化率は37・ 高齢者は健康に対する知

の取り組みを紹介します。 る「支えあいの地域を目指して」 今回は、岩代地域で行われてい

元気塾いわしろ

で、一般社団法人いわしろふれあ ポーツセンター各種団体連携事業 体力維持を図るため、教室を開催 連携し、地域の高齢者の介護予防・ しました。 いスポーツクラブと当センターが 福島県体育協会ふくしま広域ス

る介護予防・介護保険制度につい スポーツと、当センター職員によ る体操・脳トレーニング・ニュー ころふれあいスポーツクラブによ 5回シリーズの教室では、いわ

> また、参加者全員で行った「ニュー は大いに盛り上がりました。 スポーツ・カローリング大会」で ての講話を2会場で行いました。

さくらの会

を結成し、「道の駅さくらの郷」の 認知症予防教室の卒業生が、認知 症介護予防グループ「さくらの会」 二本松市の平成29年度の地域型

> 間をお借りし、毎月第2金曜日に 活動しています。 協力により、食堂が開くまでの時

てしまいます。 えず、あっという間に時間が過ぎ 防ゲーム」や、二本松市の「ほん とうの空体操」など毎回笑いが絶 リーA 増田方式による認知症予 受講した地区住民2名が行う「ス 介護予防サポーター養成講座を

に参加頂きました。

●岩代産業文化祭での オレンジカフェ

では、地域の方ともっと交流を図 カフェいわしろ・(認知症カフェ)」 紀行」で運営している「オレンジ 「特別養護老人ホームいわしろ



さくらの会



岩代産業文化祭

りたいという想いから、昨年10 ボット体験コーナーや介護相談 に開催された地区の文化祭に出店 高齢者まで約100名の地域の方 コーナーを設け、小さな子供から するお手伝いをしました。介護口

互い様」や「お互いに元気でいな ていきたいと思います。 で生活できるように、地域課題を いう地域の方々が住み慣れた場所 た。〝支えあい〟=〝お互い様〟と いと」と周りへの気遣う言葉でし 緒に考え、出来る事から行動し 地域の方々が口にするのは「お



県 中 支部

づくりをコーディネート』。 『域住民と専門職とのネットワー

安積高齢者あんしんセンター(安積地域包括支援センター)

管理者 安西 里実

地域包括ケアシステムにおいて 地域包括ケアシステムにおいて インフォーマルサービスも たり、インフォーマルサービスも たり、インフォーマルサービスも を発揮し、個と環境の相互作用 センターは、「コーディネート」機 包括支援センター は、「コーディネート」機 包括支援センターは、「コーディネート」機 包括支援センターは、「コーディネート」機 包括支援を調整 していくための潤 からメゾ、マクロレベルまで連 からメゾ、マクロレベルまで連 でき はないかと考えます。

ます。 内会の会長及び地区社協、民生委 を考える連絡会」を、 齢者人口の多い地域です。当セン 0人、高齢者人口約8,500人、 位置する安積町を主に担当してい テムの構築、そして深化・推進を ターにおいても地域包括ケアシス 高齢化率4%と郡山市内で最も高 平成27年度より地域ケア圏域会 当センターは、 安積町は人口約36, 日々活動しております。 「安積町地域の支え合い 郡山市の南部に 安積町30町 0

2回開催しています。
ンバーとなり、全体の連絡会を年薬剤師会や歯科医師会等が構成メ薬剤防会や歯科医師会等が構成メ

できるかを考える機の地区に分けた「エリア会議」の地域特性や抱える課題は、共通のものもあれば、独自のものもあのもあれば、独自のものもあれば、独自のものもあれば、独自のものもあれば、独自のものもあり、より地域の実情を踏まえ、課題や目標を共有し、自分達に何ができるかを考える機

会となっています。

を通し、「通いの場」 を通し、「通いの場」 を通し、「通いの場」 が立ち上がり、 りが始動したり、少 りが始動したり、少 りががか動したり、 しずつですが地域が しずつですが地域が

業所(67事業所)も、いる介護サービス事安積町に所在して

意見をいただきました。
は物のことを知りたい」等のごと地域のことを知りたい」「もっの声を聞き、事業所としても「地の声を聞き、事業所としても「地に参加しています。地域の皆さんとれぞれの地区の「エリア会議」

では、まこれら では、まこれら では、からも地域住民の活動を支り、介護予防的視点や地域づくり の視点からも地域住民の活動を支い、介護予防的視点や地域づくり の視点からも地域住民の活動をとよる、 では、他関ケークを構築し、個別ケータの視点がらも地域住民の介護サービス

専門職や事業所の立ち上げました。ネットワーク」をおりまり、専門職である。

安積町地域の支え合いを考える連絡会



エリア会議の様子

おります。 つなげることができればと考えて持っている知識や技術等を地域に

私たちの活動は日々、試行錯誤 の連続ですが、地域住民と専門職 とのネットワークを形成し、つな た地域で安心して暮らせる地域づ た地域で安心して暮らせる地域づ ながるよう、「コーディ なりにつながるよう、「コーディ なりにつながるよう、「コーディ なりにのながるよう、「コーディ ないます。



部

『出会い、学び、繋がり合う関係づくり』

会津若松市若松第3地域包括支援センター 管理者 森山 秀

45 % です。 る地域となっています。 26%と同じ圏域でも大きな差があ 心とした大戸町、 援センターは、 大会の会場地となる門田町が圏域 会津若松市若松第3地域包括支 大戸町が農村部で高齢化率 門田町が住宅地で高齢化率 芦ノ牧温泉街を中 鶴ヶ城マラソン

課題を話し合う地域ケア会議を開 学校区毎に地域住民の方々と地域 催してきました。 包括支援センター発足当時から小 会津若松市では平成18年の地域

サロンや老人会ではどんな事をし のサロンとも交流したい」「他の 数も増え、少しずつ見守りの輪が ことになりました。年々サロンの は「町内会単位の集りだから、他 できてきています。 ている」ということから、町内単 る機会が無い」「交流の輪が減っ で「老人会が減ってきた」「集ま ことを検討してきました。その中 位で住民と一緒にサロンを増やす 方々と地域ケア会議を通し色々な 当包括では、 地域の役職者の 各サロンから

> を開催するようになりました。 になり、サロン同士の交流を目的 のか?」といった声が上がるよう ているのか?」「どんな人がいる に平成28年度からサロン大交流会

で開催している福祉医療の専門職 年々増加しています。ボランティ ボウリングで、3年目となる今年 アも40名以上の参加があり、圏域 度は140名以上の参加があり 内容は、ゲーム機の脳を使った



サロン交流大会 1



サロン交流大会2



地域ケア会議(協議体)全体会

専門職の方々に参加して頂いてい ネットワーク会議を通し、地域の

交流会のコーディネートをしてき な輪になることをイメージし、大 れの輪が繋がることで一つの大き 会議で専門職の輪を作り、それぞ の輪を作り、専門職ネットワーク 役職者の輪を作り、サロンで住民 このように、ケア会議で地域の

を積み重ね顔の見える関係につな お互いを知る機会にもなり、それ う仲間意識・我々意識が育ち、「有 した上で、一緒にやっているとい だけでなく、お互いの活動を理解 がっています。単に「顔がわかる_ 住民と専門職が一緒に活動し、

> える輪を更に太く強くしていくた 考え、お互いを知り、皆が助け合 ができればと考えています。 機的な繋がり=顔の見える関係 めの見守りネットワーク会議の開 構成している「住民」・「役職者」・ 守り体制の充実を図るために、 専門職」と一緒に地域のことを に関連する企業の方々と、地域を 一やコンビニ、金融機関等生活 現在、ケア会議の課題だった見

が一つでも増えるよう日々の業務 繋がり、一緒に考え、 に取り組んでいきたいと思います。 これから出会う方々から学び 地域の笑顔

催を進めています。



シフラは整備されたものの、医療

部

花と緑に囲まれた人口約16.0

当町は、震災と原発事故の前、

『富岡スタイルの地域づくりに向けて』

富岡町地域包括支援センター センター長 萱野

も故郷に帰れるね」「良かったね」 区域を除き避難指示が解除されま の自治体に戻れるね」「住民の方 した。「良かったね」「やっと普通 6年の時を経て帰還困難

2017年4月1日午前0時富

除染が3.000件以上を超え、 あり、他の地域では、 めても835人であり、未だ県内 今年1月現在で、新たな住民を含 時を要し、この間に亡くなられた のとおり、一部解除までに6年の 00人の町でありましたが、前述 んでいた帰還困難区域が未解除で 外に広範囲に避難したままです。 おります。また、町内の居住者は 高齢化率も22%から30%に迫って より人口は約3.000人減少し、 方や若い世代を中心とした転出に これは、人口の約3分の1が住 家がなくなっ 家屋の解体

ばかりです。

えられます。 ど問題等が山積しているためと考 の「地域」自体が喪失しているな か再開しておらず、何よりも従来 連施設やサービス事業がわずかし や福祉施設をはじめ多くの生活関

を始めたものの、 べきか」との検討 包括ケアシステム 難事例が増えている中で、「地域 民が広範囲に居住している上に困 中心に、いわき、富岡に職員を配 まだ、緒についた の構築はどうある 置し業務を行っておりますが、住 この中で当センターは、 郡山を

は、住民の実態把 強化を図り、当セ めとする見守りの 祉協議会等をはじ 務として、社会福 りと実態把握を急 そのため、見守

> 制の強化を図っています。 者と行政が協定を結び見守りの体 便局や金融機関をはじめ各種事業 行っています。また、町内では郵 レベル(状況)に応じた対応を 情報共有と連携はもとより 住まいの形

ています。 力を注いで行く必要があると考え や元気アップ教室等での介護予防 う、住民自身が主体となった活動 などを行い、人的資源の育成にも 教室や認知症サポーター養成講座 等を促すために、引き続きサロン よる見守り体制が構築できるよ 住宅をモデルとして、住民相互に 今後は、町外のいくつかの復興





秋のバーベキュー祭りで乾杯!

システムを構築できればと考えて 会資源作りを目指し、町外におい 携会議等の更なる深化、また、新 興拠点を中心とした箇所を「新た います。 スタイル」の地域づくりに向けて て包括的な支援を継続し、「富岡 ては、復興住宅等を「地域」とし との在宅医療・介護連携などの社 たな医療機関やサービス事業者等 な地域の創出」と捉え、 また、町内の曲田地区などの復

を進めていきたいと思いますの がら、それぞれの地域で町民支援 で、よろしくお願いいたします。 様には、ご理解とご協力を頂きな 域包括支援センター、事業所の皆 今後とも、居住先の自治体や地



の構築について

Ш

勿来・田人地域包括支援センター 管理者 野口 富士子

居高齢者、 齢化率45%と高くなっており、 00人、高齢者数約760人で高 疎化・高齢化に伴い人口約1,7 ていました。しかし、現在では過 は約8,700人の住民が生活し 林業従事者が多く、昭和24年ごろ 域を支えてきました。かつては、 地は極めて少ないため、 殿町に接しています。 に急俊で山地が全体に連なり、 いわき市田人地区は、 認知症高齢者などの相談 高齢者のみの世帯が増 西北を鮫川村と古 勿来地区 林業が地 耕 独

足し、 を選択できる環境にあります いため、高齢者が介護を必要 介護保険サービス事業所も充 増えております。隣接地区で 動が困難な状況にある住民も 全て廃止となり、買い物や移 共交通機関であるバス路線も が増加しています。また、公 ンフラの整備がなされていな 生活インフラが整備され、 山間部においては生活イ 利用者が自らの暮らし

> 課題について情報共有・解決に向 けた協議を重ねていく仕組みが作 ア会議』、 協議体)』、市レベルの『中地域ケ あい活動 ベルの『小地域ケア会議・個別ケ ア会議』、 ステムの構築に向けて、 れない現状があります。 とした際にも、支援が十分に得ら いわき市では、地域包括ケアシ

当センターでは、 田人貝泊地区

(第2層協議体・第3層 町レベルの『住民支え 自治会レ

られています。 など関係機関が地域の

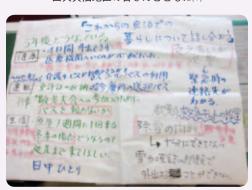
> で安心して暮らせない」という声 通院の支援が必要な高齢者がいて があげられていました。 がなく、このような状況では地域 あげられ、その中には「買い物や なった世帯の支援について課題が した。その中で、 『小地域ケア会議』を開催しま 利用できる介護保険サービス 住民より高齢に

かりました。そのため、 用地区が限定されている状況が分 配食サービス事業においても、 集落では、特に介護保険サービス 業所へ「山間部における、サービ の提供が行き届いておらず、市の の中でも、 行いました。その結果、田人地区 査」を実施し、 ス空白地域に関するアンケート調 そこで、管内の居宅介護支援事 幹線道路から奥に入る 地域の実態把握を 現在は

田人貝泊地区 これからの暮らしについて

田人全体地図

田人貝泊地区の皆さんとともに(1)



田人貝泊地区の皆さんとともに(2)

が必要と感じております。 後を見据えた様々な仕組みづくり ティアの育成など、5年後、 のサービス内容の検討や、ボラン 調査を行うとともに、 住民に対して、 ネットワーク強化を行い、 部における多職種・関係機関の 政等と共有し、配食・食料品の配 ついて、住民と専門職の団体・行 ス事業者へ働きかけをしています。 し、介護保険事業所や配食サー 当センターでは、 さらに、このような地域課題に 地域内移動手段の確保、地域 食に関するニー 今後も、 個別支 山間 10年

ともに地域課題について語り合 援を通じ、住民と専門職、 ています。 づくりを目指していきたいと考え い、地域の中で解決できる仕組み 行政が